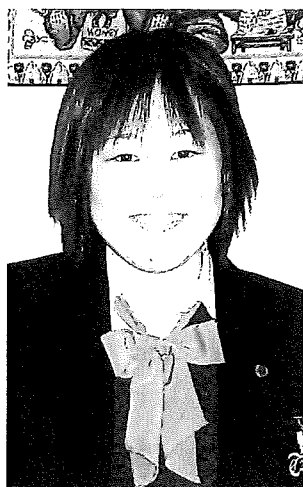


最優秀

# 留学の、その先で……



福井県

山木神奈

「退院したよ。でも、ママ（ホストマザー）の補助なしには歩けない」

私は、この事実を母に知らせようか知らせまいか、随分迷いました。震える手で、日本の母あてに送ったこのたった一行のEメールを母は、一体どのように受けとめたことでしょうか。

日本を離れて七か月。しかし、アメリカに着くと同時に、今から一年間アメリカでの留学生活が始まるという思いで、私は生き生きと輝いていました。

「夢がかなうというのは、こういうことなんだ。お父さん、お母さん、本当にありがとう」

成田空港でちぎれる位手を振ってくれた父や母の姿を、私は、ふと思いついていました。

「神奈、体に気を付けて頑張りなさいね」

別れ際、少しの涙も見せなかった私とは違い、私に異常なほど過保護だった母のあの泣きじゃくる顔に、母の深い愛情を感じました。

母からのふとしたきっかけで、私は小学二年生から「ラボ国際交流」に参加していました。英語で遊ぶゲームや英語劇がたいへんおもしろくて、私は、ラボのある週末が待ち遠しくてたまりませんでした。そして、幼いこの時期にして、私は外国での未知の生活にあこがれ、留学という目標に向かって、五年、十年歩き続ける決意をしました。

中学一年生の時、夏休みの一か月間をアメリカのホストファミリーにホームステイをしました。もちろん、高校も迷わず国際科に進みました。そして、その一年生の七月から一年間、ラボの受け入れ団体の家庭にホームステイし、現地の高等学校に通学するというこの留学体験こそが、私の青春のすばらしい第一歩となったのです。

「ハロー。マイ ネーム イズ カンナヤマキ」

私は、ウィリアムズ家の家族の一員として、家族のみんなと同じ日常生活を送りました。目に触れるもの、肌で感じるものの一つ一つがまさにこの国の文化であり、興味深いものでした。もちろん、

家族との友情を深めるのにも、そんなに時間はかかりませんでした。

さて、いよいよ九月から新学期。私は、ウィリアムズ家の長女で年は一つ下のオリーブと一緒に、心を躍らせて学校に通い始めました。そして私は、野心をもつてグローバルな視野をしっかりと身につけようと必死になっていたように思います。だから、ありのままの自分を表現しながら、ストライカーハイスクールでの学校生活を思う存分エンジョイできる幸福感こそ、誰にも邪魔されない自信に満ちあふれていました。その成果が、十一月、Home coming のクイーン・キングの選挙で、見事日本人である私をクイーンの座に導いたのです。

「ママ、クイーンだよ。私、クイーンになっちゃったわ」

ホストマザーも、こればかりは本当に驚いたみたいで、彼女の大きな胸に私をとり込むようにして抱きしめてくれました。そして数日後、

「パーティーで着るドレス。はいプレゼント」

と言って、真っ赤なドレスを私の目の前に広げたのは、私の方が驚きでした。

「ママ、パパ、オリーブ。サンキュー、サンキュー、サンキュー……」

私は、何十回お礼を言ったことでしょう。日本人であることを忘れるくらい、赤いドレスに身を包み、私はすっかりシンデレラ姫気分になりました。もちろん写真をとって、

「お母さん、見て。私、がんばったんだよ。赤いドレスの私、決まってるでしょ」

とちよつと誇らし気なコメントを付け加えて私は、すぐに日本の母に送りました。

毎日毎日がかかり楽しくて、流暢に英語も話せるようになり、勉強の他にも、イベント、レクリエーションと、病気一つしない忙しい日々を送る何とも幸せな私でした。

「嬉しいな。今度はスキー旅行（二月十六〜十八日）だ」

これこそ一か月も前から楽しみにしていただけに、初めて少し熱っぽいと感じる体をおして、二泊三日の旅行に参加しました。

しかし、どうも体調はすぐれませんでした。帰ってきた後、今まで感じたこともない寒さで体が震えるのです。暖炉の前にも少しも体は楽になりませんでした。

その日の真夜中でした。急に苦しくなってベッドから横に出ようとして、バタツと倒れた時、「これはおかしいぞ」と直感しました。この後のしばらくを覚えていません。幸い、小さなクリニックの開業医でもあったパパ（ホストファザー）が、熱い体になっていた私をクリニックに運び込み、手当をしてくれたのです。あくる日、知り合いの病院で診察を受けたところ肺炎と診断され、入院中脱水症状も起こしましたが、四、五日で退院しました。

「カンナ、テイクケア。グッドラック」

私は腕にかかえきれないほどの素敵な花束こそありましたが、私の体は、車いすにしっかりとおさまっているという姿でした。

「変な格好……。でも歩けないんだから仕方ないか」

こんな私の心の中をつぶやきなど、周りに聞こえるはずありません。それでも、私のこのちっぽけなみじめったらしい不安を全て払いのけるかの様に、私をとり囲むみんなが、家族以上の温かい心と思いやりで接してくれたので、私は、慣れない車いすに乗っていても笑っていられたのです。

夜、自分の部屋でポツンと一人になって伸びた自分の足を触った時でした。それまでこらえていた悲しみが全身をおおい、日本の母の姿を思い出したとたん、なんと私の手はもう母にメールを打ち始めていたのです。

「退院したよ。でも歩けないの。一步も足が前に出ないの」

心の沈黙を破ったからでしょうか。不思議な勇気がいました。頑固なくらい負けず嫌いの性格の私が、ここにきて母に弱音を吐き、それ以上に、心配をかけることを一番に恐れたからかもしれない。しかし、まだこの時は自分の病気の重大さと、まさか歩けなくなるという恐怖や不安は、みじんのかけらも抱いていませんでした。

ものおじしない持ち前の明るさだけは天下一品——。オリビアと交わす英語のジョークも、私に軍配があがるほどですから、私は、あまりこだわらないこんな性格に育ててくれた親に感謝しなければいけないと思うことが、アメリカに来てしょっちゅうありました。

二、三日家で静養しました。しかし、どうしても学校に行きたくてオリビアの前で、はしゃぐ身ぶ

りで立って歩こうとしました。でも私の足はどうでしょう。前に出なければいけない右足も左足も、一歩も出ないのです。

「オリビア。もういいの。遅くなるもの、先に学校に行つて」

私は、初めて自分の体を情けなく思い、パパやママの前で大声をあげて泣き崩れました。

再び病院に行きました。検査ができるもつと大きな病院に変わることになったのでした。私は、アメリカの救急車で、しかもサイレンを鳴らさないで、二時間走り続けてようやく病院に着きました。もちろん、ママはつきつきりで私を見守ってくれました。

しかし、この頃から私は、自分の体に大きな不安を持ち始めました。

「今だけでしょ？歩けないのは、今だけよね」

この疑問を、どんなに周りのドクターやナースの人たちに投げかけたかったことか……。でも、こんな小さな日本人患者を手厚く心優しく一生懸命になってくれる人達を前にして、私は、ひと言も言えませんでした。

すばらしい病院です。気持ちも大きくなる一方で、病気の原因究明のため、つらい検査は幾つも続きました。中でも、骨髄液採取は悲鳴をあげたいくらい痛くつらいものでした。ところが、こんなに最新の検査や私の生い立ち、病歴などあらゆる角度でも、私のこの病気の原因はもとより、その治療方法も見つからないという最悪な結果が出て、私はどん底に落ちていた時でした。

「神奈ちゃん、お母さん来たわ」

ドアを開けて入って来たのは、まぎれもなく母。メールを見て、遠いアメリカとはいえ、やはりいとも立ってもいられず、ラボの先生と一緒にすぐ飛んで来てくれたのです。しばし病氣のことを忘れてしまうほどに、日本語しかも福井弁で交わす母との会話が、私にとって感動的であり、嬉しい限りでした。

「お母さん——」

まさか、自分がアメリカに来て歩けなくなって、母に看病してもらうことになるうとは、誰が予想できたでしょう……。しかし、現実なのです。私が夢に描いていた留学生活は、こんな病院生活ではなかったはず——。

「お母さん、私はただ寝てるだけだよ。ただ寝ていて、ただ歩けなくて、それだけ？」

この言葉は、慣れない地で一生懸命私を介護する母の胸に、グサリと突き刺さりました。親として母親として子を想う気持ちを私は測り知ろうともせず、自分の母への甘えだけで、こんな残酷な言葉を投げかけていたのです。反省する心の余裕はありませんでした。

とうとう、私もバチというものが当たりました。母が来て三日後の夜中です。急に吐き気がおこり、「お母さん」と呼びかけることすらできない位、息苦しくなったのです。思わずとっさに、枕元の紙コップを母の顔を目掛けて、私は力を振りしぼって投げつけました。

「どうしたの？」

「……………」

もう何一つ言葉になりません。母も、あまりのことで顔も青ざめ、あわててブザーを押したのでした。私はあわただしくICUに移されていきました。そして意識がなくなり、たちまち昏睡状態になっていった時、母は父に連絡を入れたといいます。

「万一の時、神奈を私だけが看取るのはあまりにも悲しすぎる」

そんな母の計らいも知らず、眠りから覚める様に目を開けたその前に、父の顔があったのには、心臓が飛び出る程驚きました。

「お・と・う・さ・ん」

「——かな——」

二人の会話は、たったこれだけでしたが、危機を脱した喜びは、お互いの涙に充分にじんできました。

しかし、父や母の安堵に反して、私の心の中には、ますます自分の病気に対する絶対的な不安で支離滅裂、揺れ動いていました。一分間に百回以上の呼吸のつらさも、体に電気が走るほどの痛いつらい検査も、私にはもう限界にきていたからです。

「歩けないなら、歩けないでいい。私は、もうそれでいい——」



挫折感からくる心の葛藤は、私の中ではめまぐるしいものでした。

ところが、こんなに精神的に参っていた私を救ってくれたのは、ストライカーハイスクールのクラスメイトでした。ICUから普通病室に戻れたその日に、クラスメイトが片道二時間かけて、すっ飛んできてくれたのです。

「アーユー ハビングファン？（病院生活を楽しんでいる？）」

久しぶりのみんなのユーモアとスマイルが、私に“未来に駆け出す光を持って”と言わんばかりにパワーに満ちていて、私は感無量でした。みんなが帰った後、私のベッドのまわりはぬいぐるみと手紙の山であふれていました。

「神奈。あなたは、みんなと一生懸命頑張っていたのね。我が子ながら素晴らしい」

母がそう言うと、少し離れた所にいた父も一緒にうなづいて、にっこりと笑っていました。ところが、しばらくして父が言いました。

「日本に帰ろう。お父さん、来る飛行機の中で、ずっと考えてたんだ」

私は、すぐ母を見ました。今度は母が父に合わせるかのようにうなづいていました。だけど、私は、『ノー』です。

「私は、アメリカにいたい。日本に帰る自信がないの。それにあの痛い検査はもうイヤ。ここで、これからしっかり頑張ってリハビリして、早く学校に戻りたい」

私は、とことん抵抗しました。だから、この日から、ひたすらリハビリ室に通いました。困り果てた父や母と、つつ走る私の複雑な雰囲気の前に、（ホストファミリーの）パパとママが神妙な顔でこう言ったのです。

「神奈は、私達の子供だから（留学期間の）最後まで面倒を見たい。それに、ここで今歩けなくなった神奈を見放すより、神奈と一緒にいたい」

この言葉は、私の心に驚きと感動をもたらした

「私は、たった一留<sup>い</sup>学生なのに、こんなにもパパやママに愛され、家族の一員になっていたんだ」と、気づかされたのでした。とにかく一生懸命リハビリをがんばりました。そして、父や母は、もう何も言わず、私をこのアメリカにおいて日本に帰って行きました。私は、荷物をまとめた父や母の後ろ姿を見てつぶやきました。

——お父さん、お母さん、私を信じてくれたんだね。わがまま、ごめんなさい。私、負けないから。本当にありがとう——

今の私——。くよくよしていた以前の私ではありません。自分一人だけで生きているのではなく、ドクターや看護婦さん、富田先生（唯一の日本人女医）、パパ、ママ、オリビア、それにクラスメートのみんなの「がんばれ！」というすごい励ましこそ、前向きな試練を私に与えてくれているのだと思います。

そんな時、私のことがオハイオ州の地元新聞に記事となって載ったのです。

『日本人留学生、「ギランバレー症候群」という病氣と闘う』

その反響はものすごいもので、数え切れないほどの励ましのカードや手紙、プレゼント、見舞金など、たくさんの善意が寄せられて、私は改めてつくづくと思い知ったのです。

「私は、思ってもいなかった何ものにも代えられない素晴らしい出会いに感謝しなければならない。決して、私は不幸ではないということ。体が不自由であっても、自分を卑屈に思わず、めげずに頑張る輝く自分であるために努力しなければいけない」

私は、ひよっとして嬉しくなってきたのかもしれませんが、それは、自分で考え、自分で判断し、自分なりの人生の目的に向かって進んでいく精神的な自立こそ、これからの自分に最も大切であることを学べた喜び、それを噛みしめたからです。

入院生活は、六週間で終わりました。退院後は週三回のリハビリに通い、春休み明けに合わせて、車いすによる登校で何の支障もなくハイスクールに復学することができました。

「久しぶりの学校、やっぱり最高!!」

誰も私の車いすの姿に目をとらわれていません。むしろ、この私が変に周りの視線を意識する方が、これからの私の行動力を自分で抑制することになると、ハッと気づきました。私は以前と同様、学校中行けないところはないくらい、クラスメートみんなが何のわだかまりもなく私のパートナーとなっ

て、私をしっかりとサポートしてくれました。また、少しして、オリーブのお兄さんが私の介助役に回ってくれたりして、車いすにこそなつたけれど、楽しい学校生活を最後の最後まで送ることができました。感激でした。

サンフランシスコでの帰国前報告会も無事終え、とうとうアメリカでの留学生活にピリオドを打つ日がやってきました。私は、パパやママ、オリーブに笑顔で力強く言いました。

「ホエン、アイ ウォーク アゲイン、アイム カミング トゥー シー ユー。(私、歩けるようになった、会いに来るね)」

私は、パパとママからプレゼントされたアメリカ製の車いすに乗り、大きくさよならの手を振りました。空港で、アメリカをあとにする時、私は、確信しました。

——車いすになっての日本への旅立ちこそ、私のこれからの生き方におけるいろいろな可能性を示唆し、また、日本で始まる今までと違った生活の新たなステップへのいわば突破口である——

悲運にも、私は車いす生活者となつてしまったけれども、障害者という意識の枠がはずれた解放感のあるアメリカで、日々生活しながら、それがあらゆる自信につながっていったことは、留学生活を終えた一番の私の収穫といえるでしょう。

成田空港では、一年前と同じように父や母が、迎えに来ていました。私は改めて、父や母に日本語で言いました。

「ただいま。いろいろとありがとう」

病気のこと是一切触れず、疲れた私の体を優しくいたわってくれる両親の愛情を再び噛みしめる福井への帰路の旅でした。

「お姉ちゃん、お帰り…」

我が家に着いて、玄関の戸を真つ先に開けてくれたのは、少し声変わりして照れくさそうな顔をした弟でした。私は、全身の力が抜けんばかりに、なつかしい気分でいっぱいになり、そのまま弟の手をぎゅっと握りしめていました。しかし、私が目にして本当にこみ上げたものは、私が車いすで動き回れるようにと、父と弟が日曜大工で家中の段差にとりつけた板でつくったスロープや、トイレのドアをはずして広く大きく使えるアコーディオンカーテン、また車いすの高さに合わせたベッドの特注の厚手マットなど、家族のありがたいぬくもりでした。

父や母は、私の帰国前に、籍がおいてある東高校に行き、車いす学生としての願い出に行つたそうです。ところが、話の最初に、養護学校の話を持ち出された時は、さすがにショックが大きかつたようです。

「娘は、ただ歩けないだけで、健全な体であり、この国際科への復学を望んでいる」

まず、私の体に関する学校側の誤解をとき、車いすによる正式な復学の許可をもらうのに時間がかかりました。そして、それには母の介助者付きが条件として一つ加わりました。

「お母さんも、高校生に戻った気分図書室で勉強するのもいいかも……」

そう言つて、母は仕事を辞め、私と母の二人三脚の生活が始まったわけです。

復学は、夏休みの補習からと決まりました。さあ、私にはリハビリです。そこで、アメリカのドクターに紹介された金沢の大学病院に行き、再び苦痛の骨髓液検査を受けました。

「血液検査も骨も全く異常はないのに、ギランバレー症候群による後遺症は重い方だ」

医師の所見を聞いて暗い表情になっていた父や母に、私ははっきりと自分の決意を話しました。

「私、頑張つてリハビリをして何としても歩けるようになりたい。そして二本足で立つてアメリカのパパやママ、オリーブに絶対に会いに行く。自分で、もうそう決めたの」

この心の誓いこそ、リハビリにはがぜんヤル気が出てきて、車で二十分かかるリハビリテーション病院に、毎日欠かさず通っています。

ずらりと訓練器具がならぶリハビリ室。リハビリを担当する先生たちの辛抱強い努力と、他の人が一生懸命リハビリする姿に、私は感動しながら、自分の気力、体力が充実していくことに幸せを感じて止みません。

数日前、赤とピンクを基調とした私のかわいいギブス（骨盤帯付両長下肢装具）が出来上がってきた。リハビリがますます私にとって待ち遠しくてたまらなくなりました。

私は今、心から母に感謝します――。

「お母さん、私との指切りの約束、守ってくれているんだね。そう、自分のリハビリの姿、どうしてもお母さんに見られたくないの。自力で立って歩けた時、部屋の外で待っているお母さんを一番に、大声で呼ぶから。これからは、本当につらいリハビリが待っているけれど、私、がんばるよ。お母さん待っててー。そして、ありがとう」

山木神奈

昭和五十九年十二月十八日生まれ 高校生 福  
井県武生市在住

選評

あなたの輝くばかりの学校生活の様子を眩しい思いで読んだのですが、幸せの頂きで襲われた病気、その病気に立ちむかうあなたの姿に、私はとても感動しました。あなたは学生でまだ若い。障害をもってからの日も浅い。これからの長い人生で、きっといろいろなことがあり、いろんな想いをすることでしょう。でも、私は思うのです。「あなたなら大丈夫」と。あなたには、どんな困難もプラスに転換できる先天的な能力が備っているのです。

(羽田 澄子)